

Concert Reviews

●田崎茂子

田崎茂子による全6回の「ピアノ大全集」シリーズ第2夜は、「古典からドイツ・ロマンへ」のプログラムはハイドンの「ピアノ・ソナタ第50番」Hob. XMI-50・ベートーヴェン「同第2番」Op. 11、そしてシューベルト「同第21番」Op. 96.0。

使用されたピアノは1925年製のニューヨーク・スタインウェイ。だからなのが、ハイドンではややフォルテピアノに近い響きが漂着する。秀抜なテンポ感覚と音色の見事なまでの美しさ。そしてあくまで自然体での歩みは、古典的均整に根差しながらもロマン派に移行する、独特のテンペラメントを醸し出して比類がない。

そして恐るべきはベートーヴェンに対するアプローチである。あたかも楽器が進化したように、ハイドンとはまるで異なる音色やタッチで巨大なスケールを構築していく展開は、そのままドイツ・ロマンの伝統に身を浸したようでさえある。ダイナミックな造形、起伏とみずみずしい潤いに満ちた抒情、劇的な高揚、それは内省にまで深く到達する極めて高い精神性を創出した。

そしてシューベルトに結実されたのは、精緻で研ぎ澄まされた美と、清澄で純度の高い天上の音楽。今年秋の第3夜がいよいよ楽しみだ。(4月19日・東京文化会館(小))